

2021年8月8日 礼拝説教要旨

詩編講解説教72「平和をもたらす王」

詩編72：1～7、エフェソ2：14～18

詩編第72編は「王の歌」です。1節の表題に「ソロモンの詩」とありますが、このソロモンという人はダビデの息子であり、ダビデから王位を引き継いでイスラエルの王となった人です。ダビデは波乱に富んだ人生だったのに対して、ソロモンの時代はイスラエルにとって安定し繁栄した時代だったという評価があります。特にソロモンは賢者、知恵ある王として知られておりまして、箴言や雅歌といった知恵文学と呼ばれる文書にもソロモンの名が付してあります。主イエスが山上の説教の中で、空の鳥、野の花を見よと言われたところで「栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」(マタイ6：29)と言われたことはよく知られているでしょう。そのように栄華を極めた王としてユダヤ人には根強い人気があります。ただ最後は良くありませんでした。列王記上にその記述がありますが、多くの外国人の女性を愛し、彼には七百人の王妃と三百人の側室がいたと記されています。それゆえ「彼女たちは王の心を迷わせ、他の神々に向かわせた」(列王記上11：4)とあります。最後、ソロモンは異教の神々を拝むようになり、それが元で国は分裂していきました。

ソロモンの評価はさておき、王によって国は立ちもし倒れもする。国の繁栄は王の存在にかかっているということはどの国でも、どの時代でも共通して言えることではないかと思います。今日においても独裁的な指導者が上に立つ国は不安定で経済的にも貧しいと言えます。ミャンマーのことを思うと心が痛みますが、軍が支配する国というのは当然ながら力、暴力で国民を支配するようになります。これは最も不幸な国の形態です。もちろんわたしたちはこのように具体的な王の支配を思い浮かべることができそうですが、聖書はもっとその上に立つ存在に目を向けています。つまりどういうお方を神さまと信じているか。誰を主としているか。そこにわたしたちの人生の決定的なことがあります。

「王が正しくあなたの民の訴えを取り上げ、あなたの貧しい人々を裁きますように」(2節)ここでの「裁く」というのは断罪することではなく、貧しい者の訴えを聞いて公平な裁判をすることです。この言葉の背後には、裁判においてしばしば権力者によって真実が曲げられるようなことがあることを示しています。そうすると富む者が有利となり、貧しい者がさらに虐げられるということが起こります。人間の支配というのはいよいよそうなります。そういうことがあれば何が正義なのか、真実なのか分からなくなるでしょう。そういう社会は不幸であると言わなければなりません。

この小さき者、貧しい者がむしろ顧みられる必要があります。そしてこの貧しい者を顧みてくださる王こそ聖書に示されるまことの神さまであり、その顧みが具体的に現されたのがイエス・キリストの救いです。「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです」(Ⅱコリント8：9)主イエスは貧しい者であるわたしたちのところに来てくださいました。わたしたちと同じまことの人となられ、わたしたちの貧しさをご自身のものとして受け止めてくださいました。この神さまの救いを知る時にわたしたちは神さまが決して貧しい者を軽んじるお方ではないことを知ることができます。このお方がわたしたちの王なのです。その王のもとに生きる。そのような神さまを主とする、王とする幸いがここにあります。

『ハイデルベルク信仰問答』問31では、キリストの三職「預言者」「祭司」「王」について述べています。「王」のところでは「わたしたちの永遠の王として、ご自分の言葉と霊によってわたしたちを治め、獲得なさった贖いのもとにわたしたちを守り保ってください」とあります。そのようにわたしたちの命を守り保たれる神さまがわたしたちの主であり王なのです。そのために神さまは独り子をお与えになられ、その命をささげてくださいました。わたしたちはその王のもとに守られています。それはどのような逆境、試練においても変わらない普遍の救いです。そしてその王のもとに生きる時に、わたしたちも小さな王として命を守り保つ務めに遣わされていくのです。

今日のところには「平和」(シャローム)という言葉があります。旧約聖書において平和(シャローム)は単に争いがない状態のことを言うものではありません。もっと積極的な意味があります。それは神さまと人が良い関係にあること。人間同士が互いに良い関係にあること。この良い関係を造り出していくことです。それが聖書における「義」です。原文ではこのシャロームと合わせて「義」(ツァデーク)という言葉が出てまいります。良い関係はそこに平和(調和)をもたらし、命を育みます。「王が太陽と共に永らえ、月のある限り、代々に永らえますように。王が牧場に降る雨となり、地を潤す豊かな雨となりますように」(5～6節)この「太陽」「月」「雨」といった自然の営みも、その平和(調和)の中で命が守られ育まれることを示します。

今月、わたしたちは平和のために祈ります。それは単に争いのない世界を願うことだけではありません。わたしたちの生きているこの国が本当に命が守られ、育まれる場所になっているのかどうか。弱い立場にある者、貧しい者が守られる社会になっているのかどうか。一部の人間が力で支配する世界には調和は生まれませんし、命が守られる保証もありません。公平な裁判も行われなんでしょう。わたしたちの国はどうでしょうか。寄留の外国人の命が保護されない国は本当に平和だと言えるのでしょうか。真の平和のために祈りをあわせましょう。